

実践報告——【特集】COVID-19と「移動する子ども」

子どものことばの力を育むための遠隔実践の取り組み

海外の複数言語環境に育つ幼児が主体的に楽しめることばの活動の模索

塚本 祥子*

■要旨

本稿は、子どものことばの力を育むための教育実践とはどうあるべきかについて検討するものである。そのために、筆者が海外の複数言語環境に暮らす幼児を対象に行った遠隔日本語教育実践の取り組みについて、実践者である筆者の内省や、幼児とことばのやりとり、幼児の母親からの話をもとに考察した。結論として、子どもが自分を表現したり他者と関わったりするためのことばの力を育むには、実践者自身が子どもに主体的に関わることで良好な関係を築き、子どもがどのような点に楽しさを見出しているのかをよく観察し、子どもの主体性が発揮されるような活動を考えて実践していくことが重要である。

■キーワード

年少者日本語教育
複数言語環境
海外
幼児
主体性
ことばの力
遠隔実践活動

© 2020. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

本稿では、筆者の行った海外の複数言語環境に暮らす幼児への遠隔日本語教育実践（以下、「実践活動」）の取り組みについて考察する。本実践活動を行うにあたり、まず考えたのは、子どものことばの力を育むために、どのような点を意識して活動を組み立てていけば良いかという点である。

川上(2011)は、多様な背景をもつ子どものことばの力を育むための教育実践を考えるための

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科修士課程 (Eメール: shkt81@fuji.waseda.jp)

前提として、子どもは「自分にとって意味のある文脈が与えられ、日本語を使うときに最もよく日本語を習得する」ということ、つまり「子どもが主体的に学ぶときに最もことばを学ぶということ」を指摘している (p.101)。実践を行う上で重きをおくべきなのは「子どもの主体性が発揮されたり、子どもの日本語の力が伸びたりしたように〔実践者である〕大人が感じる瞬間」であり、それは「子どもと実践者との関係の中で感じられる実感のようなものである」と述べている (p.103)。その上で、年少者日本語教育実践に求められるのは「あらかじめ設定されている目標に向かった実践をし、それを研究するだけの実践研究ではなく、動的なやりとりと内省を通じて記述していくという動的な実践研究」であるとしている (p.103)。実践者に求められるのは「子どもが何を日本語で言いたいのか伝えたいのかを探りながら、子どもを理解しようとする」姿勢と「子どもの主体を理解しようとする主体として子どもに関わる」姿勢なのである (p.104)。

本実践報告では、上記の点を踏まえた上で、筆者が行った実践活動の取り組みを、実践者である筆者の内省を通して振り返り、子どもの主体性やことばの力の育成の観点から分析する。以下、第2章では実践の概要として、実践活動開始の経緯や、実践対象である幼児Eについて説明する。第3章では、実践者である筆者が、全6回の実践活動の中で、Eとどのように関係性を構築していき、毎回の実践活動でどのようにEの主体性を捉えて次の活動へ繋げていったのかを、活動内のEの反応と、どのようなことばのやり取りが生まれたのかという点を含めて、一連の流れとして記述していく。そして第4章で考察を行い、第5章でまとめと今後の展望を述べる。

2. 実践の概要

2. 1. 実践活動開始の経緯

本実践活動は、早稲田大学大学院日本語教育研究科設置科目「日本語教育実践研究(3)」の一環として行われたものである。当該科目では本来、都内の小・中学校に赴いて年少者日本語教育のための実践活動を行うことが一般的であった。だが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて学校が休校の措置をとったことと、早稲田大学が対面での課外活動の自粛を要請したことを踏まえて、2020年度春学期は、国内または海外の複数言語環境で暮らす子どもに対して遠隔実践を行うことになった。筆者は担当教員の紹介のもと、ドイツで暮らす幼児Eを対象に、

6月から7月にかけて週に1回、毎週決まった曜日の同じ時間に30分程度、計6回の遠隔実践を行った。ここでいう遠隔実践とは、互いの自宅からビデオ会議システム Zoom を通して行う形式の実践を指す。Eの母親とは、実践活動開始前にメールでやりとりを行い、Eのことばの状況や性格面、好きなものについて情報を得た。そして、顔合わせと自己紹介を兼ねて行なった1回目の活動の際に、Eの母親の言語教育観に関する話などを聞き、活動の方針の相談をした。毎回の活動ではEの母親がそばで見守り、筆者とEの間でことばのやりとりがうまくいかなかったときには、適切な声かけで補助を行ってもらっていた。毎回の活動の終わりには、Eの母親から見た活動内のEの様子などについて話を聞くこともあった。

2. 2. 実践活動のねらいと方針

当該科目の実践活動のねらいと方針は以下の通りに定められていた。

本実践のねらいは、海外で暮らす複数言語環境の子どもの「ことばの力」を育むことです。日本語の知識を獲得させ、その結果を評価することをねらいとしていません。子どもが日本語を使って、他者と豊かなやりとりを経験することを第一に考えます。そのため、本実践の内容は、お子さんの様子（年齢、成長段階、日本語能力等）に合わせて、興味・関心にあった活動を中心とします。（実践活動協力家庭へ向けて当該科目担当教員が作成した「お子様のオンライン授業についてのお願い」から抜粋）

複数言語環境で育つ子どもがこれから生きていく上で必要になるのは、自分を表現したり他者と関わったりするためのことばの力である。幼児Eは、家庭の外で日本語に触れたり、家族以外と日本語で交流を行う機会の少ない国外環境で暮らしている。そこで筆者は、Eが主体的に関われる活動を通して楽しい対話を重ねる中で、日本語で自分を表現し、他者と関わるのできることばの力を育んでいくことを目標として実践活動を行った。

2. 3. 幼児Eについて

本実践活動の対象者である幼児E（以下、E）について述べる。Eの母親によると、Eはドイツで生まれ育ち、日本には生後3ヶ月と1歳10ヶ月のときにそれぞれ4週間ほど滞在した経験があるのみである。家庭内では、ドイツ語母語話者である父親とはドイツ語で、日本語母語話

者である母親とは日本語で話している。1歳半から現地の保育園に通っており、ドイツ語の発話の方が多かったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて自粛生活が始まり、自宅で母親と過ごす時間が長くなってからは、日本語での発話も増えてきて、独り言も日本語で話すことが多くなったという。Eは、筆者との実践活動が始まってすぐに3歳の誕生日を迎えた。実践活動開始時のEは、すでに相手が日本語で言っていることの大半を理解し、受け答えも日本語で行うことができていた。ひらがなも、Eの母親が絵本や幼児教材の読み聞かせをするなかで一通り読めるようになっていた。Eの母親の話では、普段のEはドイツ語と日本語を混ぜて話すこともあるようだが、実践活動中にドイツ語が出てくることはほとんどなかった。上記のようなEのことばの状況に加えて、Eが動物のイラストやぬいぐるみ、絵本が好きであることや、恥ずかしがり屋であるというEの性格についても、実践活動開始前にEの母親とメールをやりとりする中で情報を得ていた。

2. 4. 使用するデータの種類

本実践報告で使用するデータは、筆者が活動の計画や反省などを記したフィールドノートと実践活動記録に基づいている。実践活動記録は、Eの母親に許可を得て活動内の様子を録画・録音したデータをもとに作成したものである。これらの記録を本稿で公表することに関して、Eの母親から同意を得ている。なお、本稿は当該科目の課題として作成した実践報告書を大幅に加筆修正したものであり、本稿を公表することに関して当該科目の担当教員からも許可を得ている。

3. 実践活動全6回の振り返り

第1回目 動物のパペットやイラストを取り入れた自己紹介活動

まず、初めての顔合わせを兼ねて行った初回活動の主な目的は、実践者である筆者のことを幼児Eに知ってもらい、これから毎週画面越しに会って話をしたいと思ってもらえる関係性を構築することであった。Eは、はじめは不安げな様子で、筆者が名前を聞いても答えずに母親の陰に隠れてしまっていた。そこで、事前にEが好きだと聞いて用意していたぬいぐるみのパペットを用いて、下記のような取り組みを行った。

【エピソード1】

Eが不安そうにしていたので、いっしょに日本語で楽しいことをする友達としてうさぎのパペットを紹介することにした。はじめにパペットを隠した状態で、「おともだちを呼んでもいいかな?」と問いかけると、Eは「やだ!」と答え、画面のそばから離れたがっていたが、うさぎのパペットの耳をチラつかせると興味を示した様子だった。うさぎの耳だけを画面に出して見せ、「うさちゃんは恥ずかしがり屋さんみたいだから、いっしょに名前を呼んでくれる?」と聞くと、Eは画面をじっと見ているだけだったが、うさぎを少しずつ完全に画面の前に出して見せると、画面に近づいてきて微笑んでいた。Eがぬいぐるみを握りしめていることに気がついたので、「Eちゃんは何を持ってるの?」と聞くと、持っていたぬいぐるみを画面に押し付けて見せようとしていた。「その子なんて言うの?」と聞くと、Eは満面の笑みで「あんぱんまん!」と答えていた。

(2020年6月21日第1回目実践活動記録)

このように、はじめは筆者に対して拒絶の姿勢を示していたEだが、遠隔実践という環境を活かした手法で興味を惹きながら対話を試みることで、徐々に打ち解けてくる様子が見られた。その後も、Eの好きな動物のイラストを取り入れた自己紹介の活動を行う中で、筆者がうさぎのイラストを見せたときに、Eもうさぎのぬいぐるみを持ってきて見せてくれるなど、相互的な関わりも生まれた。筆者が自分の好きなものを紹介した後、Eの好きなものを尋ねると、Eは元気よく大きな声で「いちばんあんぱんまんがすき!」と話していた。

第2回目 誕生日に関するものを取り入れた活動

第2回目の活動では、Eが3歳の誕生日を迎えた直後であったため、花やプレゼント、パースデイソングなど、誕生日に関するものを介してコミュニケーションをはかることを目的とした。Eは、誕生日を祝われるということが恥ずかしい様子で、こちらが用意したものに対して明確な反応を示したり、誕生日の話題に関して積極的に話そうとしたりはしていなかった。筆者の問いかけに対して「ママが言って」と答えたり画面のそばを離れてしまうという場面もあった。だが、誕生日プレゼントにもらったというものを持って来て見せてくれて、そこから対話のきっかけが生まれることもあった。

第2回目活動内でEの主体的な言動がもっとも見られたのは、Eが自分の絵本を持ってきて

筆者へ向けて開いて見せて、そこに書かれた動物の名前を楽しそうに読み上げていたときだった。絵本にうさぎが出てくる場面で、筆者が自分の持っているうさぎのパペットを振って見せ、「一緒だね」と声をかけたとき、Eが「でも違う色」と自分で気づいた点を発言してくれたことが印象的であった。その発言に対して筆者が、「そうだね、この子は何色？そっちの子は何色かな？」と聞くと、嬉しそうに両方の色を答えてくれた。これまでは、筆者の問いかけに対してEが答えて終わるといことばのやりとりがほとんどだったため、Eの働きかけによって双方向の対話が繰り返られるようになったことは、Eの主体性を引き出す活動を行えるようになるための大きな進歩であったと言える。その後、誕生日ケーキのイラストについて話すために用意していた誕生日カードを見せる際も、ケーキの周りに描かれている動物の名前や色について尋ねると、Eは楽しそうに答えていた。

第3回目 幼児Eの興味・関心の高いものをテーマにした活動

2回の実践活動を通して、Eが自分の関心の高いものに対して主体的な関わりを見せてくれるということが分かったので、第3回目では、初回活動でEが好きなものとして挙げていたアンパンマンをテーマにした活動を行った。母親から、Eは歌や踊りも好きだと聞いていたので、「リズムに合わせて体を動かし、ことばを使う」という目的でアンパンマンの絵描き歌や手遊び歌を取り入れたが、人前だと恥ずかしがってしまうようで、あまり乗り気ではない様子だった。また、アンパンマンのキャラクターについて聞いてみたが、目の前にないものについて話すのはまだ難しいようだった。だが、イラストや絵本を見せると、筆者が何か聞く前に、描かれていることに関してEの方から積極的に話し始める場面が多く、主体的に楽しみながら活動に取り組んでいる様子が見られた。その中で、ことばのやりとりに広がりを感じられた印象的なエピソードを紹介する。

【エピソード2】

Eの好きなアンパンマンと動物をテーマにした絵本を見せていた際、りすがどんぐりを持っているイラストが出てきた。そこで、Eに「どんぐり見たことある？」と尋ねてみると、初めは「ううん」と答えていたが、筆者が「秋になったら見られるかもね」と言うと、少し考えながら「どんぐり拾ったことあるよ」と教えてくれた。「公園とかで？」と聞くと「うん」と答え、「どんなだった？」と聞くと「ん～、楽しかったよ」と答えて

いた。「先生もどんぐりとか松ぼっくり拾ったことあるよ」と言うと、「Eもおばあさんと松ぼっくり見たことあるよ」と過去の経験について教えてくれた。少し言葉に詰まりながらも、自分が経験したことについて懸命に伝えようとしている様子が感じられた。ひとつの事柄に関してこれほど長く会話が続いたのは初めてであった。(2020年7月5日 第3回目実践活動記録)

他にも、イラストに出てきたアンパンマンのキャラクター同士の関係性について、Eが自分から知っていることを話し始めた場面もあり、Eが自発的に自らの気づきや経験を話すことのできるきっかけを与えられた活動となった。

第4回目 乗り物のイラストや絵本を取り入れた活動

第3回目の活動では、イラストや絵本を介したことばのやりとりが活発に行われたので、第4回目の活動では、アンパンマンと乗り物を題材にした絵本を中心に据えた活動を行った。テーマとして乗り物を選択したのは、第3回目の冒頭で、Eが車のおもちゃをことばで説明しながら次々と見せてくれたことがきっかけである。Eの主体性を引き出すために心がけた取り組みとしては、絵本を見せる際、文章を読み上げる前に「これは何かな?」「何色の乗り物かな?」「何をしているんだろう?」といった問いかけを行い、Eが自分で考えて発言できるように工夫したことである。Eは絵本に描かれている日本の乗り物にはあまり馴染みがないせいか、前回のようにならざるに自発的に自分の気づきを発言することは少なかったが、上記のような問いかけには目を輝かせて楽しそうに答えていた。絵本に出てきた飛行機や海に関連するEの経験について話してくれる場面もあった。また、前回までは物の名前や色に関することばのやりとりがほとんどだったが、今回は物の大きさや数についても話すことができた。同じ事柄に関して1ターン以上ことばのやりとりが続くことも複数回あった。筆者が絵本を見せている様子を真似して、Eも自分の絵本を持ってきて広げて見せてくれたり、「見て」と言いながら身の回りにあるものを持ってきてそれについて楽しそうに話してくれたり、主体的に筆者と関わろうとしている様子も見られた。

第5回目 画面越しに一緒に粘土で遊んだり絵を描いたりする活動

4回の活動を通して、筆者の方から事前に用意した物を介して言葉のやりとりを行うという

形式では、Eの意思が反映されにくいため、Eの主体性を引き出すことに限界があることを課題だと感じていた。そこで第5回目では、Eのやりたいことを中心に進めていくなかでEの主体性が発揮されるように、粘土や絵の具を用いた自由な形式の造形活動を行うことにした。第4回目の終了時に、Eが粘土で遊ぼうとしている様子を見たことで着想を得た活動である。

実際に活動を行ってみると、Eは黙々とひとりで造形活動に取り組み始めたため、画面越しにどのように対話を試みて活動を共に進めていくかという点が困難であった。そこで、筆者が絵の具で異なる色を重ねるとどんな色になるかを聞いてみたり、異なる色の粘土を「こねこね」と言いながらこねて見せてみたりすると、Eも色を混ぜるということに関心をもったようだった。Eは、非常に生き生きとした様子で粘土を混ぜながら、何度もリズムカルに「こねこねこね、どんな色になるかな!？」と、初めに筆者が何気なく発した言葉を真似して何度も繰り返していた。そばで見ていたEの母親も、「色を混ぜて遊ぶのは初めてだったので、とても興奮していて楽しそうだった」と話していた。また、Eのことばの力の伸長を感じる以下のようなエピソードも起こった。

【エピソード3】

Eのパレットに固形絵の具が何色も入っているのが見えたので「何色持ってるの?」と聞くと、Eは「なに?」と言っていたので、「何色持ってるか数えてみようか。イチ、ニー…」と言い直した。すると、Eも筆者がしていることを理解したのか、一緒にパレットに入っている色を指しながら数え始めた。Eは3からはひとりで数え始めて10まで数え上げ、少し考えてから「11」と言っていた。そばで見ていた母親は「すごーい、わかるの!？」と驚いており、Eが10以上の数字を言えたのは初めてだと話してくれた。その間にもEは「12、13」と続けており、「14」と数え終えた時に筆者が拍手して褒めると、誇らしげな顔をしていた。(2020年7月12日 第5回目実践活動記録)

Eの頭の中で、10以上の数え方がすでに記憶に蓄積されていたのか、それともその時に数の法則を見出して言えるようになったのかは定かではないが、それをアウトプットするきっかけとなる意味のある文脈を、活動内のことばのやりとりの中で提示することができたのは大きな成果であったと言える。その後のEは、自分から粘土を水で濡らして混ぜることやおもちゃの包丁で粘土を切ることを提案して、ことばを発しながら主体的に生き生きと活動に取り組んでいた。

第6回目 互いに絵本を見せ合う活動

本来、子どもの主体性を引き出すためには、子どもの希望を聞いてそれに合わせた活動を行うという方法が有効であると考えられるが、以前はEにどんな活動をしたいかと尋ねても答えを得ることができなかった。だが、絵本・歌・絵の具・粘土と、2人で取り組める活動に広がりが出てきたことで、その中で次は何をやりたいかを尋ねたときに返答を得られるようになった。第5回目の活動の終わりに「次はまた粘土をやりたい？それとも絵本を読むのが良い？」と尋ねたとき、Eは「来週は本がいい」と言っており、その後のことばのやりとりの中で、Eもたくさん絵本を持ってると聞いたので、「来週は先生も絵本を持って来るからEちゃんが持っている絵本も見せてね」と約束した。このようにして、第6回目は筆者の方から絵本を一方的に見せるのではなく、Eが持ってきて見せてくれるものを中心に活動を進めることにした。

当日、双方の機器がオンラインで接続されると、Eは自分で描いたという絵を筆者に見えるように掲げた状態で待っており、筆者に対して主体的に関わろうとする様子がうかがえた。Eの描いた絵についてことばを交わした後、話題を絵本に移すと、Eは自分が見せたいと思う本を次々と持ってきて、それぞれの本のページをめくって見せてくれた。ただ、Eはこの日はあまり調子が良くなかったようで、いつもより発話が少なく、途中で床に突っ伏してしまう場面もあった。その際は、筆者が用意していた2冊の絵本を、両手にはめたパペットに持たせて、「うさちゃんとくまちゃんが新しい絵本を持ってきてくれたよ！どっちがいい？こっちは動物の絵本で、こっちは食べ物の絵本だよ」と声をかけた。Eはゆっくりと顔を上げてこちらをじっと見たあと、「こっち！」と笑顔で食べ物の絵本を指差していた。

絵本に途中で飽きてしまった様子のEが、自分で持ってきた音の出る幼児用教材に黙々とひとり取り組み始めた際は、Eの主体性を重んじて見守りつつ、教材から発せられた音声に関連した話題で対話を試みることで、天気やハートの形についてなど、新しいことばのやりとりを行うことができた。筆者がハートの形を赤い粘土で作って見せると、Eも興味をもったようで、自分も粘土を持ってきて、前回と同じように異なる色同士を「こねこね」と言いながら混ぜ始めた。筆者が「どんな色になった？」と聞くと、楽しそうに混ぜている色を答えていた。終了時刻になってもEはまだ造形活動に夢中の様子だったため、「また今度一緒に粘土で遊ぼうか」と尋ねると、にこやかに頷いていた。今までは、筆者が最後に挨拶をしてもEはあまり反応を示さないことが多かったが、今回は筆者がパペットを使って「くまちゃんとバイバイしようか」と声をかけると、すぐに笑顔で手を振ってくれた。

4. 実践活動の一連の取り組みに対する考察

4. 1. 実践者と実践対象の子どもとの関係性の変化

まず、実践者である筆者と幼児Eの関係性の変化について述べる。第1回目の活動では、Eは初対面の筆者に対して警戒心を抱き、関わりを持とうとしていなかったが、Eの興味がありそうなものを用いながら応答性のある声かけを行うことで、次第に問いかけに答えてくれるようになった。第2回目からは、Eの自発的な発言も徐々に増えてきて、ひとつの事柄に関して双方向的なことばのやりとりを行えるようになった。Eが、家族ではない第三者である筆者に対して積極的に話をしてくれるようになったことは、Eと筆者との間で良好な関係性を築くことができたということを示していると言える。また、第1回目の活動は10分ほどしか続けることができなかったが、回を重ねるごとにことばのやりとりや活動の内容に広がりが出てきたことで、第2回目では20分、第3回目からは30分というように、活動を行える時間も段々と長くなっていった。Eの方から筆者に対して働きかけを行う場面も多くなり、Eの主体性が発揮されるような活動を行えるようになったことも、関係性構築が順調に進んだからこそ成果であると推測する。

4. 2. 子どもの主体性が発揮された瞬間とことばの力の伸長の関係性

毎回の活動におけるEの反応や、活動の中で知り得たEの興味関心に合わせて次の実践活動をデザインして実施していく動的な実践活動を行ううちに、川上(2011)が述べていた「子どもの主体性が発揮されたり、子どもの日本語の力が伸びたりしたように〔実践者である〕大人が感じる瞬間」(p.103)が数多くあった。例えば、Eが自発的に自分の気づきや経験について話し始めたときや、言語的・非言語的に拘らず、積極的に筆者と関わりをもとうとしたときが挙げられる。また、筆者から始めたことばのやりとりや、筆者が提案した活動の中であっても、Eが楽しげに話していたり、生き生きと活動に参加していたりする様子から、Eの主体性が発揮されていると感じられることもあった。

そして、Eが主体的に楽しみながら取り組める活動を行う中で、ことばの力の伸長を感じる瞬間も多くあった。例えば、第5回目の活動の際、筆者が何気なく発した言葉をEが真似して使うようになったことや、自然な文脈で10以上の数を言えるようになるきっかけをつくることができたことが挙げられる。第2章2節目で述べた「自分を表現し、他者と関わることで

きることばの力を育む」という、本実践における目標に関しても、Eが主体的に楽しくことばのやり取りを行いながら活動を進めていくなかで、自分の好きなものや知っていることに関して、ことばで表現して他者に伝えようとする気持ちが強くなっていることがうかがえた。

4. 3. 子どもの主体性を重視した活動を行う上での課題

第5回目と第6回目の活動で特に葛藤を感じた、Eの主体性を重んじてEのペースで活動を進める際に、どの程度実践者が介入するべきかという問題について考察する。筆者は初め、実践者は子どもが主体的に活動に関わろうとするまで待つべきなのではないかと考えていた。だが、完全に子どもの主体性に任せて、子どもがことばを使わない活動に夢中になってしまった場合、ことばの力の育成という本来の目的を達成することができないということに気がついた。そこで、Eがひとりで黙々とことばを使わない活動に取り組み始めた際は、Eが夢中になっているものから会話の糸口を探して対話を試みたり、Eが興味を持ちそうなことを提案してみたりすることにした。そこからEが新しい楽しみを見出し、筆者とことばのやり取りを活発に交わしながら生き生きと活動に取り組むようになった場面もあった。すなわち、子どもの主体性を引き出す活動を行うには、実践者はただ受け身の姿勢で子どもが主体的に働きかけてくる瞬間を待つのではなく、自らも子どもに対して積極的に関わる姿勢をもつことが重要なのである。

4. 4. 実践活動の意義

本実践活動は、遠隔実践という形式で、国外環境に住むEに日本語で他者と交流する機会を与えることができたということがひとつの意義として挙げられる。実践者である筆者は、Eが主体的に楽しく関われる活動を行うなかで、本章の第2節で述べたような、Eの主体性が発揮された瞬間や、ことばの力の伸長を感じられた瞬間に活動の意義を強く感じられた。対象者であるEにとっての本実践活動の意義については、まだ3歳であるEに直接意見を聞くことは難しいため、毎回の実践活動をそばで見ているEの母親の話をもとに分析する。Eの母親は、Eが活動の時間を楽しそうに過ごしていると評した上で、Eが「母親である自分以外と日本語でまともな話をする時間は普段あまりないこと」を挙げ、ドイツという日本語リソースの少ない環境の中で、多様な日本語に触れさせることのできる機会として本実践活動の意義を感じていると話していた。授業の一環として最後に行った第6回目の活動終了時には、実践活動を行う前と比べて、Eの普段の様子に何か変化があったかどうかを尋ねてみた。Eの母親は、Eが日本語

で話す量が増えたことと、Eが「見て見てー」と言いながら何かを持ってきて相手の反応を求めることが増えたことを挙げ、実践活動がEに少なからず影響を与えているように感じると話していた。日本語の発話量が増えたことは、実践活動の影響であると断定することはできないが、筆者とEとの間で、互いの家にある物を見せ合いながらことばのやりとりを行うことの多かった本実践活動を通して、自分から人と関わり、物を介してことばを交わすことの楽しさをEに知ってもらえたのではないかと推測する。以上の点を踏まえると、本実践活動はEにとって、日本語で自分を表現し、他者と関わることばの力を育むための一助となることができたという点で意義があったと言えるのではないだろうか。

5. まとめと今後の展望

本稿では、筆者の行った実践活動の一連の取り組みを実践者の内省と共に振り返ることで、子どもが自分を表現したり他者と関わったりするためのことばの力を育むことのできるような教育実践のあり方について考察した。川上(2011)が述べたように、子どものことばの力を育むには、子どもの主体性を引き出せるような教育実践を行うことが肝要である。本実践活動の遠隔実践という形式は、コロナ禍において、実際の移動を伴わずに互いの自宅に入り込むような形で活動を行うことを可能にしたが、直接触れ合うことのできない画面越しの環境には活動の制約もあった。だが、そのような状況であっても、子どもの興味・関心を手掛かりにして、互いの身の回りにあるものをきっかけにことばのやりとりを行うことで、子どもと良好な関係を築いていくことができた。子どもが主体的に楽しくことばのやりとりを行う中でことばの力を育めるような活動を行うには、毎回の活動の中で子どもの主体性が発揮された瞬間を見極め、それをひとつの機会として捉えて、次の活動を考えて繰り返していくということが重要であると言える。また、子どもの主体性を引き出す活動を行うためには、完全に子ども任せにするのではなく、実践者も主体的に子どもと関わる姿勢を常にもつ必要がある。

本実践活動の対象である幼児Eとは、今後も実践活動を行っていく予定である。実践活動の継続が決まった際、Eの母親に改めて、Eに日本語を習得してもらいたいと考える理由を尋ねてみた。Eの母親は、最も大きな理由として、日本とドイツという2つの国に繋がりをもつEに、将来どちらの国でも生活することのできる選択肢を与えられるようにしたいからであると話していた。また、日本に住んでいる自分の家族は日本語しか話せないことを挙げ、Eがより

多くの家族とコミュニケーションをとれるようになるためにも、日本語の習得を望んでいると話していた。海外の複数言語環境に暮らすEにとって、幼少期から日本語で他者と楽しく関わる経験を積むことは、日本語学習を継続していくための糧になると推測する。今後、筆者が実践者として、Eの将来の選択肢を広げ、家族とつながるためのことばの力の育成に、日本語教育の観点からどのように貢献していけるか、Eが主体的に楽しめるような実践活動を続けていくなかで考えていきたい。

文献

川上郁雄 (2011). 『「移動する子どもたち」のことばの教育学』くろしお出版.

謝辞：実践活動に協力していただき、お話を伺った幼児Eのお母様には、事前に本稿を読んでいただきました。快く掲載を許可して下さったことに深く感謝申し上げます。